

『ベオウルフ』におけることば

—— 王を中心とする社会 ——

宮 崎 忠 克

序

叙事詩『ベオウルフ』には王を初めとして様々な人々の身分を表す言葉が用いられている。そこで本稿では、王の館を中心とした社会でどのような身分、役割、職業などを表す言葉が用いられているかを検討し、この詩の成立の背景となっている北方ゲルマン社会の姿を垣間見ることにする。この詩の単語の多く、たとえば *hæle(ð)* 「人、英雄、兵士」、*scealc* 「家来、兵士、人」、*ealdor* 「長(♁)、主(♁)、君主」、*cwen* 「后、奥方」、*æpeling* 「貴族、君主、英雄、人」には多義性があるので、正確な意味を把握しがたい事例がある。とくに、もともとの意味が、この詩が口承詩として伝えられた時代の意味と、どれほどの違いがあるのか、ないのか判断しがたい問題を含んでいる。このような理由から各テキスト編者のグロサリに与えられている語義に差異を生む原因となっている。¹ まずこの点は留意しなければならない。とくにキリスト教徒の詩人が伝承された話を部分的ではあるがキリスト教的に潤色しているので、この詩は話の背景から考えても時代的にかなり後代になってから一つの話として纏められたと考えられている。文字をもたない時代からの伝承であるので、この詩のかなり多くの表現が口承による定型詞と定形句から成立しているという理論が唱えられているが、この問題については改めて論じることにする。² 扱う語彙には下記の項目が含まれる。

1. 王を頂点として、以下どのような階級的序列が認められているか、あるいは初期アングロ・サクソン社会の法律に見られる用語と如何なる関連を示しているか。特に、王を表すことば、貴族あるいは賢人としての顧問、イエシーズ、セインなどの用語を取りあげる。
2. 王の家来を表す言葉とその複合語形成の特徴。
3. 王、貴族、セイン、武士以外にどのような地位、職業あるいはどのような役割の人達がいたか、この点についても言及する。
4. ベーオウルフの敵対者としてグレンデルとその母親がどのような言葉で表現されているか、その特徴は何か。

1

(1) 王を表す用語はふつう OE *cyning*³ (> *king*) で、この単語は散文のみならず、詩でも一般に用いれている。だが詩では王はさまざまな視点から表現されその多様性は著しい。以下の単語の最初に付された記号はクレバーのテキストによる。⁴ *cyning* 以外に王を表す単独語として下記の語が見られる。

単独語：† *helm* (371, 450, etc., 「保護者, 主」), *hyrde* (1742, etc., 「守護者」, 610, etc., 「神」, 750, etc., グレンデル), ‡ *strengel* (3115, 「長」, 「支配者」) † *bealdor* (2567, etc., 「君主, 主」), † *brego* (609, etc., 「長, 主」), (†) *brytta* (607, etc., 「分配者」), † *raeswa* (60, 「君主, 指導者」), † *frea* (2285, etc., 「主」, 「王」), *hlaford* 2375, etc., 「主」), *ealdor* 「長, 主」

†, ‡の付された語は詩中心の語だが、*hyrde*, *hlaford* は散文でも見られる。

だが、この詩が頭韻詩であるために幾つかの要素が「王」(*cyning*)に付け加えられ複合語化されるのが顕著な特徴である。なお、「王」と対称を

成す「女王」を表すことばとしては *cwen* (62, etc., 「后」), † *heals-gebedda* (63, 「ベッドを共にする親しいひと」, 「(国王の)配偶者」), † *folc-cwen* (641, 「人々の女王」) などが見られるが, 「王」を表すことばに比較して頻度がきわめて少ない。なお, 上に記した *heals* の元の意味は「首」であるから, かなりの転義が見られる。

- (i) 第2要素 *cyning*: † *beorn-cyning* (2148, 「英雄的王」), *eorþ-cyning* (1155, 「世俗の王」), † *þeod-cyning* (2963, 2970, etc., 「国民の王」), † *worold-cyning* (1684, 「現世の王」), *folc-cyning* (2733, 2873, 「民衆の王」), † *heah-cyning* (1039, 「偉大な王」), † *guð-cyning* (2335, 2563, etc., 「戦の王」), † *leod-cyning* (54, 「国民の王」), † *sæ-cyning* (2382 「海の王」).

形容詞「高い」(OE *heah*)が「王」を修飾するような事例は少なく, むしろ「戦」, 「海」などの名詞による複合語化が一般的類型を示している。したがって, 頭韻の要求によって多彩な語が第一要素に選択される可能性がある。「真の」, 「栄光」, が「王」修飾すると「神」を指すので注意が必要である。⁵

- (ii) 第2要素 *weard*, *drihten*, *fruma*, *frea*, etc.:

weard: † *epel-weard* (1702, 「母国の守護者」), † *hord-weard hæleþa* (1047, 「人々の宝の守護者」).

drihten: † *freo-drihten* (2627, 「高貴な主」), † *gum-dryhten* (1642, 「人々の主」), † *mon-dryhten* (2865, 2647, etc., 「主」), † *sige-drihten* (391, 「勝利の主」), † *wine-drihten* (360, 「親しい主」), † *frea-drihten* (796, 「主」)

fruma: † *leod-fruma* (2130, 「国民の君主」), *ord-fruma* (263, 「指導者, 長」), † *hild-fruma* (2640, 「戦の長」), ‡ *land-fruma* (31, 「土地の君主, 王」).

frea: ‡ *sin-frea* (1934, 「偉大な王」).

cyning 以外に代替の表現はいずれも王を指しているが, 上記の *frea* には「主」, 「王」, あるいは *land-fruma* には「王」の語義がクレーバーによって指示されている。上記のなかには容易に理解しがたい例もある。例えば, *ord-fruma* の第一要素はもともとは「点」であったが, 「槍の切っ先」から「槍」そのものを指すに至った。さらに比喩的に「長」, 「君主」などの語義が発達する。この *ord* が *fruma* と結合した。 *fruma* の語義発達は *ord* と類似しており, もともとは「始め」, 「起源」から「長, 支配者」, 後に「王」を表した。両語の結合はこの文脈では「長, 君主」を意味している。

(iii) 第2要素 *gyfa*: † *gold-gyfa* (2652, 「金の授与者, 主」), † *sinc-gyfa* (2311, etc. 「宝の授与者」), † *herg-gyfa* (1102, 「(金製の)腕輪の授与者」, 「主, 王」), † *wil-geofa* (2900, 「喜びを与える人」, 「主」).

古代のゲルマン社会においては, 戦の後など, 王が「物を与える」という行為は王と家臣がその主従関係の絆を強化する儀式的な慣習と見なされていた。この詩のなかでも典型的な描写がある。

(iv) 第2要素 *wisa* (指導者, 人, *toga* (指揮者): ‡ *brim-wisa* (2930, 「海の指導者, 王」), ‡ *hilde-wisa* (1064, 「戦の指導者」), ‡ *folc-toga* (839, 「人々の指導者」, 「族長, 指揮官」).

(v) その他: *eald-hlaford* (2778, 「親愛な主」= Beowulf), † *leod-gebyrgea* (260, 「国民の保護者」), ‡ *weorod-rædend* (1142, 「軍勢の支配者」), *mund-bora* (1480, etc., 「保護者, 守護者」), † *frum-gar* (2856, 「族長」 (cf. Lat. 'primiplus?')), † *gald-wine* (1602, 「金を与えるような友」, 「寛大な主」), ‡ *frea-wine* (2357, etc., (文字どおりは: 「友である主」, 転義「親愛な主」).

とくに上記の単音節語で引用した *frea* という単語は北欧神話に現れる *Freyr* に由来し, すなはち *Friday* はこの豊饒の女神を祝う日であるが, アングロ・サクソンの言葉では「主(主^レ)」, 「王」, 「支配者」の意味である。だが, 文脈では「主」, 「神」, 「キリスト」を表すことがある。もっとも『ベーオウルフ』では「キリスト」を指す用法はないが, 何れにしても, 本来は異教の「主(主^レ)」, 「王」がキリスト教の神に転用されるケースがある。複合語による王を表す表現は他の詩作品, 特にキリスト教的作品に見られる王の表現とは異なる点が認められる。

キリスト教化後に異教の神あるいは悪魔を指す表現が生じていることは次の ‡ *gast-bona* (177, 「魂の殺害者」) から明らかである。

(2) 貴族, 顧問, セイン: 王の次に位するのは「貴族」(OE *eorl*) Mod. E earl 「伯爵」⁶ だが, この詩のなかで世襲的な地位であったことを示す表現がある。たしかに, タキトゥスの『ゲルマーニア』には貴族の世襲制を暗示する記述がある。この語 *eorl* も多義性があり「人」, 「英雄」, 「戦士」の意でも使われた。*eorl* はとくにこの叙事詩では以下で述べるイェシーズ (*gesið*) 「武士」という意味では同義語として使われている点は興味深い。だがアングロ・サクソンの初期の法律に見られる *ealdorman* 「貴族」は見られない。単独語の *ealdor* あるいは *aldor* がその複合語のかわりに用いら

れる場合があり、この詩では後者が選択されている。この語は「族長」あるいは「長老」などの意味がありラテン語の *senior, princeps, dominus, dux* の翻訳に用いられた (*OED*, Alder, sb.²)。他に、貴族を表す語に *æpeling* があるが、この語も多義性があり王子、英雄、人などの意味で用いられる。『アングロ・サクソン辞書』(Bosworth & Toller)によると『ベーオウルフ』以外では「王」、「神」、「キリスト」の語義が与えられている。

王の顧問とも言うべき人達が存在し、*wita* (778, etc., 「賢人(複数)」, あるいは †*fyrnwita* (2123, 「老顧問」)のように「齢を重ねた」という修飾語が伴う場合がある。*witenagemot* 「賢人会」、つまり「国王の評議会」という言葉こそこの詩には見られないが、この語の由来は遠いゲルマンの社会に源を有しているようだ。現代イギリス民主政治の原点をこの賢人会に求めることも可能だろう。この詩には *ræd-bora* (1325 「顧問, 相談役」)が見られ †*sele-rædende* (51 「館の顧問たち」)と同じ役職を表していると考えられる。

王の近辺に仕える武士達は *þegn* (古語 *thane*) と呼ばれている。セインの初例は8世紀の『エピナル・エルフルトグロス』に記載があり、ラテン語 *adsaeculam* (*cassecula*) (「召し使い」、「追従者」)には OE *thegn* の形が示されている。⁷

*OED*によると *thegn* には「家来」、「家臣」の意味では『ベーオウルフ』から初例が示されている。この詩では4つの語義(クレーベル版)が示され、文脈によって「家来」、「お供」、「従者」などと訳されるが戦に随行する場合は †*heal-þegn* (719, etc., 「戦士」)と解釈されている。このセインにはいくつか修飾語句が伴う例があり、例えば †*sele-ðegn* (1704, 「広間担当のセイン」)は「侍従」を指すが、館の大広間での宴会は主従関係の絆を強める重要な行事であったからこの職責は重かったに違いない。†*ombit-þegn* (673, 「召使のセイン」)は「召し使い、従者」と同義である。その他、

戦闘の際に活躍が期待できる†*magorþegn* (408, etc., 「若い家臣」)がある。セインを取り仕切る(†) *ealdorþegn* (1308, 「セインの長(長)」)という職も見られ、フローズガール王の寵臣の一人アッシュヘレを指している。彼は貴族の出であるから上記の職務はきわめて重要な地位であることが窺える。

『ベーオウルフ』ではセインの意味は以上の通りだが辞書によると上記を含めて13の語義が示されている。⁸ 『ベーオウルフ』には記されていない語義として、同辞書には「(世襲制と区別される)貴族」が示されている。⁹

(3) 『ベーオウルフ』では「家来」、「仲間」に相当する語としてイエシーズ (*gesith*)がある。形容詞「親しい」(*swates*)との共起に見られるように王の親密な家臣の意味でも用いられ複数形で表される場合が多い。さらにこの叙事詩には†*wil-gesith* (23 「親愛な仲間」), †*eald-gesith* (853, 「老いた仲間」)も用いられている。7世紀末のイネの法律51条には土地を持つイエシーズと持たないイエシーズを区別した条項があり、前者は軍務を怠った場合、120シリング、後者は60シリングの罰金を払わねばならない。¹⁰ 後者の罰金額は「自由民」(OE *ceorl* > Mod. E *churl*)の2倍に相当する。イエシーズは戦で勲功をあげた者とそうでない者とが区別されていたと思われる。10世紀のある詩では勝利の旗持ちとしてのイエシーズについての言及があるが、ここでは「兵士」の意味である。¹¹ このように詩ではこの単語がかなり後まで使われているが、アルフレッドの時代の『年代記』の記述を読むと、当時の社会では上記のセインがイエシーズに代わって重要な職責を表す称号として定着していたと推量できる。¹²

(4) その他の役職あるいは役割： フローズガールの足元に座しているウンベルスを指して(‡) *þyle* (1165, etc., 「代弁者」、「雄弁家」)という語が使われている。解釈の難しい語ではあるがかなり地位の高い役人を表していたと考えられている。また館の内部での役割分担も上記のように明確化されていたようである。しかもヘオロトの広間での宴会を盛り上げるため

に豎琴に合せて詩を吟じる *scop* (496, etc., 「詩人」), *gleoman* (> *gleeman*) (1160, 「歌い手」, 「吟遊詩人」) が存在していた。グレンデルの母親に殺害されたアッシュヘレは †*run-wita* (1325, 「信頼のおける顧問」) と呼ばれているが、クラークホールはたんに「助言者、顧問」と語義を与えている。‡*land-weard* (1890, 「土地監視人」) という役職は、文脈では「沿岸警備兵」を表しているが、類似表現に ‡*grund-hyrde* (2136, 「海の守護者」), ‡*hyð-weard* (1914, 「港の警備兵」) がある。‡*ren-weard* (770, 「家屋警備兵」) は独立した警護の武士集団を表すのかもしれない。この *ren-* は *ærn* の音位転換であるが、*heal-ðegn* などと同様に、文脈による頭韻の必要性から造語されたと説明されている。¹³

その他の表現: †*ar* (336, etc., 「使者」), *byrele* (1161, 「杯を運ぶ人」), *geogop* (409, 66, etc., 「若者、戦士」), *duguð* は集合的に従者、家臣を表し、古参の武士の含みがあり、*geogoð* と対語を形成する。他に †*here-wisa* (3020, 「軍勢の指揮者」), ‡*sele-weard* (667, 「広間の守護者」), *ombeht* (287, etc., 「召し使い」, 「役人」), (‡) *ridend* (2457, 「騎手、騎兵」), ‡*seld-guma* (249, 「館の人、従者」) などの語が用いられている。

2

以上のように、部族の長としての王のもとには貴族、王の侍従と顧問たち、王側近の武士、館や沿岸の警備兵などが存在していた。さらに戦があれば戦場に赴く兵士、その指揮者などが部族社会の館を中心とした主たる構成メンバーである。記述の1, (2), (3)と関わりもあるが、とくに「武士」, 「兵士」を表す用語に興味深い表現が多く、様々な詩語が創造されているので、とくにこれらの語だけに焦点を当てて記述する。

(i) 第一要素、戦: †*beado-rinc* (1109), ‡*guðbeorn* (314), †*guðfreca*

(2414), † *guðrinc* (838), † *hild-freca* (2366, etc.), ‡ *gað-wiga* (2112),
 ‡ *guð-wine* (1810, etc.), † *heapo-liðend(e)* (1798), † *heaðo-rinc* (2466,
 etc.), † *hilde-rinc* (1307, etc.), † *fyrð-gestealla* (2873) .

上記(i)の *guð-*, *hild-*, *beado-*, *heapo-*, *fyrð-* などの第一要素は「戦, 闘い」の意味で, これらの要素が「人」を表す *rinc*, *beorn*, *freca* と結合して「兵士, 武士」を表す複合語を形成している。ただし, 第2要素 *wine* は「友」, *liðende* は「船乗り」, *gestealla* は「仲間」を表す。

(ii) 第一要素, 木の名前: † *æsc-wiga* (2042), ‡ *lind-gestealla* (1973),
 ‡ *lind-hæbbende* (245, etc.), ‡ *lind-wiga* ((2603) .

兵士は長槍や木製の楯を持って戦場へ赴くが, この攻撃と防御の武器はトネリコやシナの木などの堅い木材で作られている。したがって, 「トネリコ (*ash*) の人」という表現は長槍を持つ人, 「シナの木 (*linden*) の人」は楯を持つ人の意味で, いずれも比喩的に「兵士」, 「武士」を表している。類似表現の「シナの木の間」は楯持つ間という意味から「戦の間」と解釈され, 「シナの木をもつ人 (*hæbbende*)」は兵士を表す。

(iii) 第一要素: (a) 手 (*hand-*), 足 (*fepe-*), 肩 (*eaxl-*): ‡ *hand-scalu* (1317,
 etc., 「従者の一団」, 「仲間」) (cf. Clark Hall), ‡ *hond-geselda* (1481,
 「仲間」), † *hand-gestealla* (2596, 「仲間」), ‡ *fepe-cempa* (1544,
 etc., 「歩兵」), † *fepe-gest* (1976, 「歩いてくる客」, 「歩兵」), (cf.
 Clark Hall: *guest coming on foot, traveller*), (†) *eaxl-gestealla*
 (1326, 「仲間」) .

第一要素: (b) 炉辺 (*heorð-*, (> *hearth*)), 食卓 (*beod-*) など: †

heorð-geneat (461, etc., 「炉辺の仲間」, 「家来」), ‡ *beod-geneat* (142, etc., 「食卓の仲間」), ‡ *nyd-gestealla* (882, etc., 「まさかの時の仲間」)。

特に王の広間での「仲間」を表すために独特の詩語が発達していた。この特徴は「仲間」という単語に「手」, 「足」, 「肩」, 「テーブル」, 「炉辺」, 「まさかの時の」といった語が付加されるのである。「肩」, 「手」はお互いに肩を組み, 手を取り合ったりする親密な間柄を示しており, 「食卓」, 「炉端」も共に食事をとり暖炉を囲んで歓談する親しさを表している。

フローズガールのヘオロト「雄鹿」と名付けられた館は宴会の場として築かれたと語られている。この館の広間はまた, 主(壱)が家来の果たした戦の勲功に対して惜しげも無く宝物を授与する場でもある。このような主従の関係によって戦が起きた「まさかの時」(*nyd*-(>*need*))に, 家臣は王に対して強固な忠誠心を発揮することになる。この館は宴会場として相応しい別名でも呼ばれている。すなはち, ヘオロトを表す「家」, 「建物」, 「館」, 「広間」などの前に「蜂蜜酒」(*mead*) , 「ビール」, 「ワイン」)が付けられて「ワインの館」, 「ワインの家」, 蜂蜜酒の広間」, 「ビールの広間」と多彩な表現が見られる。この広間に置かれた「腰掛け(*bench*)」にも「エール」(*ale*) , 「蜂蜜酒」を伴う表現もある。いずれにせよ, 主従関係の絆を強めるためにもこの館の存在は大きな役割を果たしている。

- (iv) 第一要素, 武器, 楯など: † *bord-hæbbend(e)* (2895, 「盾をもつ人」), ‡ *rond-hæbbend(e)* (861, 「盾もつ人」), *searo-hæbbend(e)* (237, 「甲冑を着用する人, 兵士」), ‡ *helm-berend* (2517, etc., 「兜をかぶる人, 兵士」), ‡ *sweord-freca* (1468, 「剣の人, 兵士」), ‡ *scyld-wige* (288, etc., 「盾もつ兵士」), ‡ *scyld-freca* (1033, 「盾の人, 兵士」), ‡ *gar-*

wiga (2674, etc., 「槍の兵士」), ‡ *gar-wigend* ((2641, 「槍の戦士」), 広義には「兵士」, † *byrn-wiga* (2918, 「鎖帷子で武装した兵士」)。第一要素には武器を示す, 「楯」 (*bord-*, *scyld-*), 「兜」 (*helm-*), 「剣」 (*sweord-*), 「槍」 (*gar-*), 「鎖帷子を着た」 (*byrn-*) などが付されているのが特徴であり, 第2要素は, 「もつ人, 着用する人」 (*hæbbend(e)*, *berende*) ,その他は「人」, 「兵士」などの語が続く。

(v) 第一要素, 軍勢 (*here-*), 人 (*gum-*), 息子 (*mago-*) など: † *here-rinc* (1176, 「軍勢の人」) ‡ *gum-feða* (1401, 「徒歩の人」 > 「歩兵の一団」), † *mago-rinc* (730, 「若い兵士」), † *mago-ðegn* (408, etc., 「若い家来」), (†) *oret-mecg* (363, 「兵士」), *dryht-guma* (1388, etc., 「軍勢の人」 > 「家来, 兵士」)。

(vi) 兵士, 武士の単独語: (†) *freca* (1563, 「大胆な人」 > †「兵士」), † *geselda* (1984, 「仲間」), (†) *sceotend* (703, etc., 「射手」>「兵士」), *dugup* (498, etc., 「家来の一団」), *ceorl* (202, etc., †「家来」, 「兵士」, 「人」)。

以上のように, 族長としての王を中心とする部族社会のおぼろげな輪郭が浮かび上がるが, 特に王と武士との絆はこの詩の中で語られる宝物, 貴重品, 土地, 住居さらには権力の授与という形で強められた。老王ベーオウルフが火竜との対決に際して, その戦への参加をためらう仲間に対して, 若武者ウイーイラフが語る次の言葉は王と臣下との絆の強さをもっとも明確に吐露している。

我は忘れてはおらぬ, 我々が蜂蜜酒の杯を飲み干したあの時の

ことを。我々は麦酒の館で、金環を我々に下賜された王に対し
て誓言したではないか、王の身に変事あれば（拝領した）鎧、
兜、剛剣のために王に報いる所存であると。

(2633-38)

ウイーラフ自身、かつてベーオウルフからウエイムディング家の豪華な住居とその地の人々を支配する権力を与えられていた。王の危機を眼前にして彼は過去の恩義に報いようと覚悟する。武士の忠誠心はなにもこの詩で見られる特質ではなく、『年代記』¹⁴や10世紀末の詩『モルドンの戦い』¹⁵にも生き生きと語られている。

3

(1) 町の住人、農民、村民など：

ceorl は現代英語の *churl* 「無作法者」となる語だが、一般的には「人」の意味でとくに土地、建物を所有する平民を指して用いられている。

この詩には ‡ *ceaster-buend* (768) (「町の住民」) という複合語がある。クラーク・ホールは「市民」と訳しているが、しかしこの訳語は多分にアングロ・サクソン社会の町の連想によるものであろう。フローズガールの館が海からさほど遠くない場所に位置していたことはベーオウルフの一行に館への道を途中まで案内した沿岸警備の役人の言葉からも推測される。*stræt* (Mod. E *street*) 「道」は石で舗装されていたと語られているが、これもローマの軍道が意識されていたかもしれない。だが、町のたたずまいがどのような様子だったか、説明の言葉は一言もなく、城壁で囲まれた砦の町というイメージもない。おそらくベーオウルフ詩人もこの点に関してはあまり明確に語るのをためらったのかも知れない。‡ *land-waru* (2321,

「土地の人々」は火竜の吐き出す炎によって周囲を囲まれたその土地（あるいは国）の人々（ないしは国民）を指して用いられている。

町にせよ、砦にせよ一般の人々の実生活が生き生きと語られる場面はないが、次のような † *beor-scealc* (1240, 「ビールを飲む人」), † *ealo-drincend(e)* (1945, 「エールを飲む人」) という表現がある。 *heal-sittende* (2015, etc., 「広間に居並ぶ人々」) はフローズガールの館の広間で歓待を受ける人達を指す言葉である。

漠然と、「人」を表すためには *man* (異形態 *mon*), *secg* (廃), *wer* (廃), *beorn* (廃) (「英雄, 兵士」の意味もある), *leod* (廃) (部族の一員), † *nipþas* (廃) (men), *rinc* (「兵士」の意味あり), † *sawl-berend* (1004 *soul-bearer*), *ceorl* (>churl) などがある。 † *sawl-berend* は文字どおりは「魂のある人」の意味だが、きわめて比喩的な用法で詩的な文脈で見られる。最後にあげた *ceorl* はこの詩ではばくぜんと「人」を指している。だがこの単語はゲルマン社会ではもともと土地、建物を所有する自由民を表した。6世紀末のウエスト・サクソン王、イネの法律ではこの本来の「自由民」の意味で用いられている¹⁶。また、ケントのエゼルベルト王の法律では *hlæfæta* 「パンを食する人」、つまり「食客」という身分があり「自由民より身分が低く、奴隷よりは上」と記されており、「自由民」の使用人を指したらしい¹⁷。 † *sige-peod* (2204, 「栄光ある人々」), † *sige-folc* (644, 「勝利の [勇敢な] 人々」) は形容詞を伴う複数形の例である。女性を表す言葉は比較的少ないことは事実である。いっぽんに「女, 女性」を表すには *bryd* が用いられるが、この語はまた「花嫁 (bride)」の意味を有している。 † *hyse* (1217) は「青年, 若者」を指す語である。

(2) 船乗り, 水夫: † *brim-liþend(e)* (568, 「海行く人」)「船乗り」), † *æ-liðend* (411, etc.同上), *mere-liðend(e)* (255, 同上), *sæ-man* (329, 同上),

‡ *mere-fara* (503), † *sæ-rinc* (69, 同上, 他ではヴァイキングの意味で使われる), † *lid-mana* (1623, 同上, 他では「海賊」の意味がある)。

(3) この詩の中では直接的に「奴隷」を指す言葉はない。だが興味深いのはベーオウルフの父の名が *Ecgþeow* と呼ばれ, *ecg* (Mod. E *edge*) は「剣」, *þeow* は「召し使い」, 「奴隷」を表す言葉であるから, 原義はたぶん「剣持ち」ということになるのだろう。一方, フローズガールの後の名は *Wealhþeow* と呼ばれている。文字どおりには, 「ケルト人の召し使い」の意味だが, クレーベルは, 「后が外国出身者と考えられていたことを示す」と述べている。*wealh* は「外国人」, 「奴隷」, 「ケルト人」, 「ブリトン人」などの含みを持つ言葉であり, 戦に負けた民族は「奴隷」の身分に転落することは珍しいことではなかった。だがこれら二人の北方ゲルマン人の名前には複雑な背景があるのかもしれない。さらに, スエーデン王, *Ongeneþeow* の名にも第2要素に上記の語が見られることも補足しておく。

アングロ・サクソン社会にも奴隷は存在しており, ケント王エゼルベルトの法律では奴隷が幾つかの階級に区別されて, 例えば, 「粉挽き人」は第3階級の奴隷, 「杯を運ぶ者, 給仕女」は第2階級の奴隷女と位置付けられている。¹⁷ 『ベーオウルフ』には *byrele* 「杯を運ぶ者」という単語があるが, フローズガールの后を指しての言葉であるから, この単語は身分の上下に関わりなく使われたようだ。客人を丁重にもてなす役割は宮廷では特に女性の大切な役割だったことは『ベーオウルフ』における描写から十分に窺い知ることができる。エゼルベルト王の法律では *esne* という語も用いられている。¹⁸ 『ベーオウルフ』では *esne* は見られないが, この詩での *þeow* については上で述べた。この単語が一般的には「召し使い」の意味で使われるのも本来の語義から判断して当然と言えるだろう。

wealh それ自体が, 「異邦人」, 「奴隷」の語義を有するから, この固有

名詞の実際の含意はさらに複雑な背景を秘めているのかも知れない。なお、この詩では *hæft* (2408, 「捕虜」†captive) という語が使われている。

4

古代のゲルマン社会では部族抗争に明け暮れた時代が続いていたと思われるが、この争いを指導する王の役割は「敵」を滅ぼすことであり、ベーオウルフの敵はグレンデルとその母親、および火竜であった。この詩のエピローグでは王が戦死した後の国民の味わう苦難の恐れが語られている。この作品のテーマを考えると、「敵」(*feond*, 164, etc.), *sceaþa* (274, etc. cf. 1803, 1805, †「兵士」), (‡) *gesaca* (1773), (†) *and-saca* (1682, etc.), † *hettend* (1828, etc) を表すことばが多用されても不思議ではない。だが、複合語を含めてその多様性には深い怨念さえ込められているような感じがする。

上記の単語のなかで *sceaða* は次のような第一要素をとり独特の複合語の用法がある。

† *feond scaða* (554, 「恐るべき敵」), ‡ *guð-sceaða* (2318, 「戦の敵」), † *leod-sceaða* (2093, etc., 「人々の敵」), † *man-scaða* (712, etc., 「悪事を行う者」), (†) *syn-scaða* (801, 「悪人」), ‡ *dol-sceaða* (479, 「狂気の狼藉者」 > 「敵」), ‡ *hearm-scaða* (766, 「有害な敵」 同上の *feond-scaða* の訳はクレーバーのグロサリによるが, *feond* は *feogan* 「憎む, 迫害する」に由来する現在分詞起源の名詞である。一方, *sceaða* は「害を行う者」に由来している (OED, Scathe)。他の修飾語を伴う事例は以下のとおりである: ‡ *heoro-wearh* (1267, 「呪われた敵」), † *ealdor-gewinna* (2903, 「不俱戴天の敵」),¹⁹ ‡ *feorh-gehiðla* (969, 「不俱戴天の敵」)。²⁰

グレンデルがどのように表現されたかを見ると、まず、上記の479, 712,

766, 969, 1267, は皆、グレンデルを指す言葉である。また、グレンデルは闇に住む † *ellengæst* (86, 「力の強い悪魔」) と呼ばれるが, *gæst* はふつう「霊」を表す言葉で *gást* と綴られることもあり, もともとは善悪の含意はない。*gæst* は ghost 「幽霊」という形で現代英語に残るが, 元の用法は the Holy Ghost 「聖霊」に見られるのみで the Holy Spirit と同義である。グレンデルはさらに「恐ろしい悪魔」(*se grimma gæst* (102)), † *aglæca* (150, etc., 「怪物」) (注: 「竜」を指す例がある) とも呼ばれている。この *gæst* の用法はもともと実体をもたない「霊」が明らかに実体を備えた存在として認識された結果と考えられる。とくに形容詞で修飾される場合, 例えば「キリストと悪魔」の *se werega gast* (125, 「呪われた悪魔」) はサタンを指していることは明らかである。† (+) *eoten* (761, etc., 「巨人」), † *deað-cwealm Danigea* (1670, 「デイン人の殺害者」), † *sceadu-genga* (703, 「闇の歩行者」), † *mearc-stapa* (103 「辺境をさまよう者」), *bana* 「殺人者, 殺し屋」²¹ もまた彼の邪悪な性格を表す言葉である。

† *cwealm-cuma* (792, 「死をもたらす者」), † *scyn-scaþa* (707, 「敵意ある悪魔」) もまたグレンデルという化け物を現実感のある存在として描くための詩的表現と思われる。だが, グレンデルを, 明確に表現しえない曖昧性が残されていると言わざるを得ない。

『ベーオウルフ』の *ættren* † *ellorgæst* 「毒気のある悪魔」(1617) の *ellor-* にはどのような含みがあるのだろうか。同じ形が1621行, 1349行では複数形でグレンデルと母親の2人を指す。この単語は単独では「ほかの場所に, よそに」として使われる副詞だが, この作品では *ellorsið* で「死」を表している。「他の場所に行くこと」という原義から派生する比喩的用法である。テキスト編纂者の多くが *ellorgæst* に alien spirit と現代語訳を与えているが「よその国(場所)の霊」では意味曖昧と言わざるを得ないので, 「この世のものではない悪魔」と一般に解されている。この作品には, さ

らに † *geólsceaft gásta* (1266, 「運命の定められた悪魔たち」) が見られ、この複数属格形はグレンデルがそのなかの一人であるカインの末裔たちを表している。他の複合語に † *wælgæst* (1331, 1995) があり、グレンデルの母親を指している。以上のように文脈によって *gást* は悪魔や天使さえ表す場合が認められるのである。さらに112行にはラテン語に由来する † *orc-neas* 「悪霊を有するもの」は結果的に「怪物」を指すと受けとられている。

彼の母は固有名詞は与えられず、† *aglæcwif* (1230, 「女の怪物」), † *mere-wif* (1519, 「湖の女, 水の魔女」), † *brim-wylf* (1506, etc., 「海(湖)の雌狼」) と記述されているが、あまり詩的な豊かさはない。一方、敵としての竜 *draca* (892) もかなり多様に描かれている。現実世界に存在する生物ではなく、空想によって生み出されているだけに、人物描写と比較するとやはりその表現にリアリティが欠けると言わざるを得ない。複合語として竜は *eorð-draca* (2712, 「地に住む竜」) † *fyr-draca* (2689, 「火竜」), † *lig-draca* (2333, etc., 「火竜」), † *nið-draca* (2273, 「敵意に満ちた竜」) と描写されている。

グレンデル、その母親、さらに火竜など、この作品に登場する彼らの意味は何を象徴しているのか、この疑問が残る。これは『ベオウルフ』という作品成立の根源に関わる問題であるから、これまでにさまざまな説や説明が提起されてはいるが、決定的な解釈はない。²² この詩は口承によって伝えられたゲルマンの史実、民話、おとぎ話などと結びつけられ、のちにキリスト教的要素も取り込んで、10世紀の写本に書き記された話が今日に伝えられている。おそらく単純なプロセスによって生み出されたものではないと思われるので、この詩の成立過程を巡る議論はこれからも続けられることだろう。なお、親族関係を表す用語については割愛する。²³

結 び

以上のように用語の検討の結果から恐らく5世紀後半から6世紀前半の北歐社会、とりわけ、記述の豊富なフロスガール王を中心としたデンマーク社会の姿が臚げに浮かび上がってくる。この詩ではデネ、スウエーデン、イエーアト、ヘアルフデネなどの各部族の系図が挿話を通して明らかとなり、部族の長(き)である王を中心として王族が形成されていたことが分かる。ただ王族の成立の背景は明確ではない。さらに古いゲルマン社会の歴史については、タキトゥスやカエザルなどの記録があるが、それとても歴史の暗部にかすかに光を投じてくれるにすぎない。

デネの一族に焦点をあてると概略下記のような共同体が形成されていたと思われる。王は貴族から選ばれるとタキトゥスは述べているが²⁴この詩だけの描写からでは貴族の本質的な意味、たとえば生まれならの貴族と戦での勲功によって叙せられた貴族との区別の明確な指摘は困難である。だが、貴族の存在は *eorl*, *æpeling* (cf. G Adel) などの言葉によってその存在が示されている。ダンネンパウアーが主張するように古ゲルマン社会の支配勢力は貴族であったという主張は興味深い。²⁵この詩の最後の部分で、ウイーイラフ(ペーオウルフの血縁者)(2860-91)はペーオウルフを見捨てた卑怯者をつぎのように糾弾する。

おまえたち一族は、土地の権利を奪われて、それぞれ放浪せねばならぬのだ、あちこちの貴族ら (*æpelingas*) がおまえらの逃亡、恥ずべき行為を耳にしたときに。貴族生まれの (*eorla*) 各自には面目を失って生きるよりは死こそふさわしいのだ。

「土地の権利」(OE *londriht*) という言葉からウイーイラフの相手は土地を所有する貴族であることが察せられる。だが、具体的な文脈で *æpeling*

は貴族以外に「英雄」, 「人」, *eorl* はさらに「兵士」と解釈しても差し支えない場合があり, とうぜん予想されることだが, この詩の現代語訳をいくつか見てもどのような根拠によって *nobleman* 「貴族」と *warrior* 「兵士」との訳語の区別ができるのか, 疑問が生じることは避けられない。

顧問としての賢人は王の任命によったのであろう。アングロ・サクソン時代の後期になってから賢人会議 (*witena gemot*) という言葉が年代記 (1050 C, 1052D) に見られるが, 賢人 (*witan*) はかなり以前からの用例がある。たとえばアルフレッドの法律の前文に *eallum minum witum* (すべての我が顧問 (賢人) たちに) という語句が見られる。

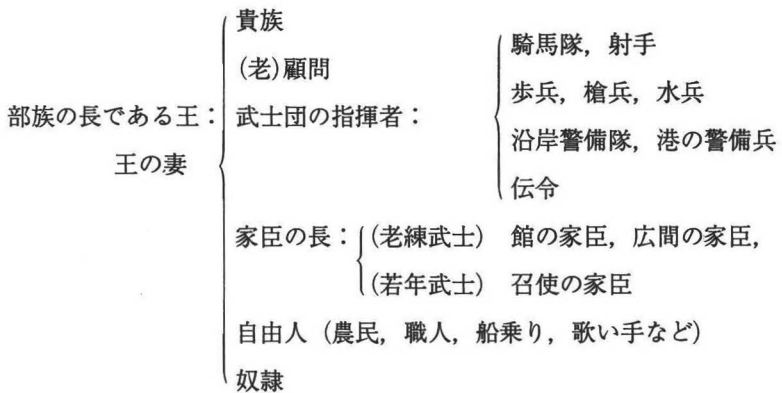
すでに述べたが武士団の指揮者は勇敢な武士が選ばれた者と思われる。武士団の頂点に立つ 7, 8 世紀のアングロ・サクソンの王は好戦的な武将であったことはさまざまな記録から知られている。史実によれば 7 世紀のノーサンプリアを支配した 8 人の国王のうち 6 人は戦死しているが, このような王の在り方はおそらくゲルマンの伝統を継承する典型例であったと思われる。

武士は水, 陸, その他の役割分担が定められていたようである。武士でも「鎖帷子 (鎧) を着た武士」, 「兜を被った武士」は身分のある者を指しているかもしれない。さらに王の側近の家臣であるセインはこの詩の中の描写によるが, イエシーズとともにともとも召し使いの意味であったが, アングロ・サクソン時代が進むにつれてセインの意味は複雑に発展した。

クラーク・ホールによると, 館の家臣 (*heal-þegn*) は *hall-officer* と訳語が与えられているので正規の役職を表していたかも知れない。この詩には見られないが, 馬係のセイン *hors-þegn* も馬丁から馬小屋を管理する役人の意味へ変化したと思われる。後に *marshal* が借用され, 今日至っている。*eorl* と呼ばれる自由人にはさまざまな職業の人々が含まれていたのだろう。刀鍛冶など武器を作る専門家は多かったに違いない。言葉の分析

から奴隷の存在も予想されるが、戦に敗れた場合の悲惨な運命は上記のウイーイラフの言葉に暗示されている。

『ベーオウルフ』という叙事詩には王を頂点として支配階級と目される貴族、王の顧問役にはとうぜん貴族も含まれたであろう。さらに王の家臣、とりわけ館の維持管理を行う役人、さらに多くの武士がその役割に応じて存在していたことが示されている。冒頭でのべたが、この詩は故郷はデンマークであるが、伝承に基いて語り継がれるうちに、詩の用語も内容もアングロ・サクソンの風土のなかに同化したと考えられる。以上述べたことを簡略化して示すと下記のようなになる。



「老練武士と若年武士」(*duguþe ond geogupa*) という言葉の位置付けは難しいので上記のように括弧内に記した。もともと前者は青年 (> youth)，後者は「貴族の家臣」あるいは「老練な家臣」で対句では老若の武士集団を表すものと思われる。

Notes

1. 本論のテキストは以下に準拠している。Klaeber, *Beowulf and The Fight at Finnsburg*, Boston, 1950.
2. 口承定形詞論については以下の書物を参照。Albert B. Lord, *The Singer of Tales* (Cambridge: Massachusetts, 1964), pp. 30–67. F. P. Magoun, Jr. と他の多くの学者が古英詩の定型詞を論じている。とくにそのいくつかを記す。Magoun, “The Oral Formulaic Character of Anglo-Saxon Narrative Poetry,” in *an anthology of Beowulf Criticism* ed. Lewis E. Nicholson (Indiana: Univ. of Notre Dame Press, 1963), pp. 189–222, William Whallon, *Formula, Character, and Context* (Massachusetts: Harvard University Press, 1969), Ruth Finnegan, *Oral Poetry* (Cambridge University Press, 1977), Jeff Opland, *Anglo-Saxon Oral Poetry* (New Haven and London: Yale University Press, 1980). これらの書物の参考文献にはおおくの論文が紹介されている。
3. OE *cyning* (cog. OFris, *kin-*, *kon-*, *kening*, OS *kuning* < *Germ. *kuningas* ← **kunjam* kin + *-ingas -ing `one belonging to or of the kind of).
4. クレバー、同テキスト、293ページ。†は詩のみで知られている語(意味)、‡は他の詩(散文)では見られない語、(†)は語が散文(グロスあるいはその他)で偶然に発見されるとき、あるいは密接な関連語が散文で記録されているときに用いられている。(‡)は密接な関連語が他の詩作品のテキストあるいは散文に現れるときに用いられている。(‡)+は語が『ベオウルフ』以外の詩では見られないが、散文でも見られる場合に用いられ、‡(+は散文での使用がきわめて例外的な場合)を示している。
5. 参考までに記すと、『ベオウルフ』では次のような神を表すことばがある。
† *Soð-cyning* (3055「真の王」), † *Lif-frea* (16, 「命の主」, 「神」), *Demend* (181, 「裁きの人」), *Dryhten* (686, etc. 「主」), ‡ *Eald-metod* (945, 「古(の)王」).
6. *eorl* は今日の earl 「伯爵」となる語だがOEの法律では「貴族」の意味で使われる場合もあるが、多義性のある語で、「勇者」、「戦士」、「指揮者」などの語義を示す。「伯爵」の意はME期になって爵位が制定されてからの語義で、

duke, count, baronなどはフランス語からの借用語であるから、earlは爵位を表す唯一ゲルマン起源の語ということになる。ノルマン人の征服以前、イングランドでは、ラテン語勅許状の*Lux*はealdormanの普通の訳語であった。征服後からエドワード3世の時代までealdormanあるいはearlはラテン語*Comes*と訳されている。ウイリアム征服王さえも'earl of Normandy'「ノルマンディ公」と称せられている。

7. Henry Sweet, *The Oldest English Texts* (London: Oxford Univ. Press, 1966^{rep}), p. 42.
8. Clark Hall, *A Concise Anglo-Saxon Dictionary* (以下、『簡略アングロ・サクソン辞書』) (Cambridge: Cambridge University Press, 1969).
9. 同上: 『簡略アングロ・サクソン辞書』
10. *English Historical Documents* 1, ed. Dorothy Whitelock (London: Eyre & Spottiswoode, 1968), p. 370. (以下、『英国歴史文書 巻1』).
11. *Judith*, 201 (London: Methuen, 1961), ed. B. J. Timmer. He has glossed *gesið* as 'companion, retainer.'
12. 『アングロ・サクソン年代記 A』, 893年には「オールドヘアハ(Ordheah) とさらに多くの王のセインが殺害された」と記述されている。
13. クレーパー, 同上, lxxxv, Language, Manuscript. § 19.7., Notes 142.
14. 『アングロ・サクソン年代記 A』 896年の記録では「王の最高のセインの多くがこの3年で亡くなった」とある。さらに亡くなった人の名が列挙され, 州長(ealdorman), 司教ともどもサセックスにおける国王のセイン, エアドルフと実名が記録されている。
15. *The Battle of Maldon* (London: Methuen, 1963, ed. E. V. Gordon), この詩には実際に991年, エセックスのモルドンでヴァイキングとイギリス人とが対峙した時の戦闘の様相がかなりリアルに記されている。語りの伝統によるにしても, ビリュフトノースの若い家来が他の兵士に「我々が蜂蜜酒を飲んで語り, 館の勇士たちが激しい戦闘の自慢話を語り合った時のことを忘れるな」と激励する部分がある。一方, この戦闘で指揮官ビュルフトノースは討ち死にするが, 彼を見捨てた逃亡者の実名が記されている。『ゲルマーニア』14節

にも「戦場を捨て指揮官より生きながらえるのは終生の恥辱であり屈辱である」と語られている。この詩では土地や宝物、剣や兜の授与の話はないが、ビュルフトノースは家臣に何頭も軍馬を与えていたと言う描写がある。

この詩は歴史上実際に起きた戦闘を題材にして創作され、『ベーオウルフ』のなかで語られる主従関係が、数百年を経てもこの詩の中で見事に反映されている。

16. 『英国歴史文書 巻1』, イネの法律 357-59ページ。
17. 『英国歴史文書 巻1』, エセルベルトの法律 357...359ページ。
18. 同上, エセルベルトの法律, 359ページ。
19. 訳語は Clark. Hall の定義 *deadly enemy* による。
20. 訳語は Clark. Hall の定義 *mortal enemy* による。
21. *bana* はグレンデル以外に次のような用例がある。(†) *feorh-bona* (2465, 「殺害者」 Hrethel の息子 Herebeald の殺害者, Hæthcyn のこと。なお, ‡ *hand-bona* (460, 「手による殺害者」) はベーオウルフを指す。
22. W. W. Lawrence, *Beowulf and Epic Tradition* (New York: Hafner Publishing Company, 1965). この作品の6章では「グレンデルと彼の母親」, 7章では「火竜」について、これまで提起された学説、解釈を多方面にわたって紹介、検討されている。
23. 親族関係の用語: ‡ *apum-sweoras* (84, 「娘むこと義父」), † *eafora* (12, etc., 「子孫, 息子」), *dohtor* (1076, etc. 「娘」), *eam* (881, 「叔父」), *gebropor* (1101, 「兄弟」), (†) *gædeling* (2617, etc., 「(男の)親類」), † *mag* (1867, etc., 「息子」), † *byre* (2053, etc., 息子「青年」, 「少年」), † *heafod-mæg* (2151, etc., 「近親者」), † *mæg-wine* (2479, 「親類(と友)」), *mage* (1391, 「女の親類, kinswoman=mother」), *sid-æpeling* (270, 「縁者の貴族」), † *suhterge-fæderan* (1164, 「従兄弟と(父方の)叔父」)。
24. Tacitus 1, *Germania* (Cambridge, Massachusetts: Harvard Univ. Press, p. 140. *Reges ex nobilitate, duces ex virtute sumunt.* 「王は貴族から, 将軍(dux)(指揮者, 司令官)は, 軍事的能力(military talents, あるいは勇氣 courage valor)によって選ばれる」。現代英語訳は *A Latin Dictionary*, ed. C. T.

Lewis and C. Short (Oxford, 1975) による。

25. 『古ゲルマンの社会状態』, 創文社歴史学双書, 昭和44年。この書(原典は論文)では貴族の問題を詳細に論じている。